

食品廃棄物・生物系

1日100t体制視野に

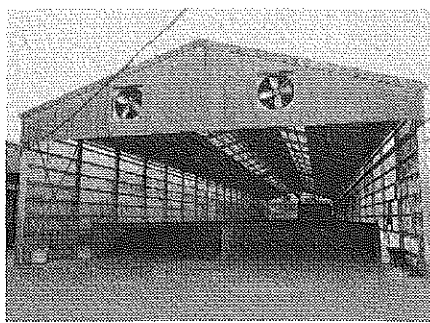
農事組合法人 農業資源活用生産組合

野菜の直納70%を目標

農事組合法人 農業資源活用生産組合(千葉県銚子市、椎名正隆代表、

〒0479-3331

50)は、牛ふんや食品残さなどを原料にたい肥



たい肥化施設外観

化を行っている事業について、将来1日当たり100tの処理体制を視野に運営を行う。同組合は、市内の畜産農家12件からなる組合で、飼育する肉牛の牛ふんと社員食堂などから排出される食品残さ、芝、せんだ枝などを混合し、たい肥を生産している。昨年10月、施設の近くに新たなたい肥化施設を竣工した。旧施設の処理能力が1日当たり30t、新施設が20t、計50tの処理能力を持つ。畜産農家で1カ月ほど置いた牛ふんは月1回搬入し、食品残さは1日当たり15t、せんだ枝などは年間90t搬入している。今後はイチョウの葉もたい肥の原料として使用していきたいと考えた。現在、1日当たり30t処理して

おり、生産量は年間約1000t。主にグループの農事組合法人、銚子育苗生産組合の組合農家20件に販売している。牛ふんと食品残さ、芝、せんだ枝、戻したい肥などをバケツで混合し、60tのレーン4本で1日1-2回かく拌しながら30日間発酵させる。新施設は、80tのレーンが1本で、シャベルローラーを使用して1日1回かく拌しながら60日間発酵する。たい肥は含水率60%程度で農家に出荷しているが利用目的などに合わせて含水率を調節している。昨年はグループ内だけでたい肥を利用して、とうもろこし50万本、キャベツ50万ケースなどを栽培。70%を市場に、30%をスーパーなどに直接卸している。昨年の春にはだいこんやジャガイモなど野菜の皮をはいだトリミング野菜の販売を開始。サラタメーカーなど

未利用廃油を開拓

神戸商店 家庭などから回収

神戸商店グループは、回収されず捨てられていた家庭や事業所などから排出される廃食用油を掘り起こし、新たなバイオマス資源として回収、利用することを検討している。現在、埼玉県春日部市で、2000世帯を対象にモデル地区として、月に一度家庭から排出される廃食用油の回収を行っている。多くがごみとして捨てられている現状を踏まえ、家庭から排出される廃食用油の回収量を増やしていきたいと考えた。同組合によれば、現在の処理量から施設を増設し、最終的には100tにまで増やしたい考えだ。今後もグループ内でたい肥の生成と野菜の栽培を行い、消費者に喜ばれるものを作りながら食のリサイクルをさらに進めていきたいとしている。

飼料高騰に理解求める

2年間で1t当たりの約2万2000円上昇してお

地域の取り組みにも力を入れていく。今年度は、三郷市の小中学校にゴーヤや菜の花を香贈、同市のフェスタに参加し、廃

減る中、家庭などへのPR活動を通して新たな資源の掘り起こし、再資源化をしていきたいとしている。

廃食用油の回収だけでなく、環境を通じた地域への啓蒙活動も行っている。グループは、東京都内の一部でもモデル地区として廃食用油の回収を行っている。3Rの推進で、廃食用油の発生量が減る中、家庭などへのPR活動を通して新たな資源の掘り起こし、再資源化をしていきたいとしている。